

ボランティアだより

かすみがうら市

四季の里

第16号

令和3年2月17日

発行

発行 ————— かすみがうら市ボランティア連絡協議会

編集 ————— かすみがうら市ボランティア連絡協議会広報委員会

事務局 ————— かすみがうら市社会福祉協議会内 ☎ 029-898-2527

あるがままを肯定し認める優しさを

かすみがうら市ボランティア連絡協議会

会長 田崎 從子

NHKスペシャル「こもりびと」(ひきこもりになっている四〇代男性とその家族を中心に取上げた番組)を観ました。実際にあった出来事や当事者の証言に基づいて制作されたものでした。

内閣府の調査によると、全国で約一〇〇万人いるひきこもりの人々の中で、その半数以上が中高年であるということでした。

番組内でドラマの主人公が「社会や学校のルールを守って生きる者が仲間だと認められて…効率ばかり求めて、優しさのなくなったこの国に自分達の居場所なんて、どこにもない。このままではいけないと頭では分かっている。でも、体が動かない…こんな自分に生きている価値なんかあるのだろうか…」と語っています。

人も物も規格品が重用され、はみ出すものは厄介なものとして受け入れられない。効率の悪いものは、どんどん排除されてしまう。繊細で真面目であるがゆえに自分で自分を追い詰めてしまう、ご家族もまた本人のためと思いながら逆に追い詰めてしまう。

誰もがその人なりのあるがままを肯定し、個性として認め受け入れる。そして、ゆったりと見守り待てる優しさを持ちたいものだと思います。

このコロナ禍で、ボランティアサークルの多くが活動を休止せざるを得ない状況です。一人一人がこの状況に負けないよう、そして誰もが明るく平和で穏やかに生きられるよう、共に支え合って乗り切っていけたらと思います。

皆さま、よろしくお願いいたします。



ボランティア活動の現状

佐賀ボランティア 大橋 信子

ボランティア活動も、昨年から続く新型コロナウイルスで何かと影響が出ています。自然の状況も長い梅雨とすごい盛暑で、本当に過しにかったです。行事は中止になりました。本来の配食ボランティアも出来ません。おたずねして、お元氣チェックが出来ません。ただただ思えばかりです。

慣れたとは言え、まだ続きます。自分を大切にすることが、他の人を守ることです。自分なりに思いあらたに心なごむ日々を送ってほしいと思います。

今回私達は、ボランティアセンターの依頼で手作りマスクを製作しました。市内中学校の三年生の方々に使っていただく予定です。一枚一枚心をこめて作りました。

これから、みなさんで力を合せていろいろな場を過して行きましよう。もう春です。

マスク作りをして

志士庫ボランティア 戸山 貞子

私達のボランティアサークルは配食サービスをしています。年配の一人暮らしの方に、栄養のある、おいしいお弁当を作って届けておりましたが、昨年度は三月以降のお弁当作りがコロナ禍の為にできなくなりました。

そんな中、ボランティアセンターから受験を控えている市内中学校の三年生を対象とした手作り布マスクの製作依頼があり、各サークルごとに材料が送られてきました。初めてのマスク作りでありましたが、一枚一枚縫い上げてみると楽しみがわいてきました。

全部出来上がった後も、続けてマスクを作っています。マスクは高齢者の方に差し上げています。

新型コロナウイルスがおさまって配食ができるようになるまで、マスク作りをしていきたいと思っています。



新しい生活様式の中での体操教室

シルバリーハビリ体操指導士の会

齋藤 玲子

新型コロナウイルスの世界的大流行を受けて「緊急事態宣言」が発令され、「不要不急の外出自粛」となり、体操教室も三月から約四ヶ月休止となりました。

六月下旬、マスク着用・消毒・三密を避ける等、環境を整え、やっと再開することができました。「待ってたわよー。」という参加者の声に嬉しさを感じました。

ところが、七月下旬茨城県の感染者が急増し、八月九月と休止。

そして、十月。感染予防対策を更に強化し、体操教室を始めました。「よかったわー。」「みんなと会えて楽しかった。」など、ありがたいお言葉をいただき、指導士にも笑顔が戻りました。まだまだ油断できない状況ではありますが、参加者の声を励みにこれからも触れあいの場を提供していきたいと思えます。



マスクやフェイスガードを着用しての体操の様子

愛ネットワークについて

愛ネットワーク 生方 眞一

新型コロナウイルスに関する情報に一日一憂しながら生活している昨今です。

私達のボランティア活動は、世の中で一緒に生活をしている方々の生活の一部を共有または代行する事により成り立っているのではないのでしょうか。

新型コロナウイルスにより、ボランティア活動が制約され、活動ができない状況が続いており残念な事です。

愛ネットワークの活動は、福祉施設入所者に対する活動と、市内在住者でご希望のある方について在宅でのボランティアを行なっております。ご存じのように、ほとんどの福祉施設はご家族を含め部外者との対面による面会は出来ない状態です。在宅者のボランティアは、相手のご要望に合わせ万全の感染予防をし、短時間での活動を行っております。

新型コロナウイルスに対するワクチンの開発と、治療法が確立される事を願っております。



お話相手ボランティア「あやとり」について

あやとり 額賀 静子

あやとりは、一人暮らしの高齢者に、電話で話しかけをするボランティアです。今年度に入り、新型コロナウイルスの影響で活動ができませんでしたが、六月後半に活動を再開しました。

毎日のニュースで、増えつつある新型コロナウイルス感染者が、いつ減少するのでしょうか。不安の中での生活をいつまで続けなければならないのでしょうか。

今こそ、私達のボランティアで安否確認や「お元気ですか」の呼び掛けが必要だと思われます。施設訪問も昨年から始めましたが、それも今は叶いません。施設での生活の中で、私達が話しかける事で、笑顔になっていただける事が、喜びとなり返って来ます。いつ訪問できるか、見通しも立たないままです。穏やかな日々が、幸せな生活が、早く戻って来る事を願っています。

最後に私達からのお願ひがあります。「ボランティアの仲間を募集いたします。」

お年寄りの方に親身になって下さる方、人生経験豊富な方の話を聞かせて頂ける良きチャンスだと思います。ボランティアに興味がある方は、お気軽に社会福祉協議会(029-898-2527)まで、連絡を下さい。待っています！

よろしくお願いいたします。

コロナ禍の今

キャッチボイス 中島 由美子

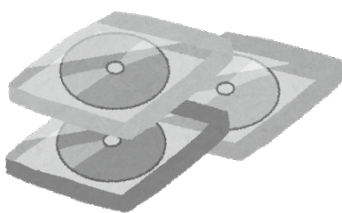
『広報かすみがうら』を音訳おんやくし、CDにして、視覚障がいの方や高齢者施設にお送りすることが、主な活動のひとつです。現在、キャッチボイスは偶数月に、図書館の朗読ボランティア「せせらぎ」が奇数月に、と交代で担当しています。

今年度、朗読や紙芝居による施設訪問は休止になってしまいましたが、三月～

五月は自粛せざるを得なかったものの、それ以降は、基本の消毒・換気・マスク着用を守り、サークル活動を続けています。

聞き取りやすい音訳・朗読をめざし、活動日には、新聞コラムやエッセイなどを各自用意し、読む練習をしています。それは、スキルアップ効果にとどまらず、様々な考え方に気づき、参考になる情報を得るといふ利点もあります。仲間との交流も、私にとって大切な時間です。

視覚に障がいがあり読むことが困難な方へ・『声の広報かすみがうら』を希望されるときは、社会福祉協議会(029-898-2527)にご連絡ください。朗読に関心があり、活動を考えている方からのご連絡もお待ちしています。



W-11111111111111111111

おもちゃ図書館ひよっこ

深井 征一郎

今年度は、新型コロナウイルスの影響で自粛・自粛で帆引き船フェスタ・あゆみ祭りなど市役所のイベント、みんなの夏祭り、皆様の団体の活動が新型コロナウイルス感染症対策で、楽しいことが次々と中止になり寂しいスタートになりました。これから予定されているイベントも開催が厳しい状況が続くことでしょう。イベントはダメ、旅行もダメでは生活が困窮し、ストレスがたまり、体調不良を訴える人が多く現れるでしょう。近くで楽しめるよう工夫したいものです。

幸いかすみがうら市は、歴史・文化・史跡・自然が多く、楽しめる場所がたくさんあります。今がチャンスととらえ「地元の魅力を知ろう」という観点から、ご夫婦、友人と少人数で市内を散策するのにも一考ではないでしょうか。参考までに

候補をあげておきましょう。

詳しいことは「歴史博物館」に相談するとよいでしょう。

① 歩崎公園 県内景勝地第一号で景色が素晴らしいです。また夏は霞ヶ

浦の風光明媚な帆引き船の雄姿が見られます。霞ヶ浦台地の生い立ちがわかる場所もあります。公園内にある交流センターでは地産・地消の食事が楽しめます。最近では、古民家江口屋がオープンし、県外の人も訪れて賑わいを見せています。

- ② 山のほうでは、雪入ふれあいの里公園があります。ここは、東京からの登山客が多く訪れる名所です。駐車場から霞ヶ浦が一望できます。
- ③ 市内には多くの城址があります。戦国時代の歴史が勉強できます。
- ④ 神社・仏閣の調度品やお祭りも楽しいものです。

このように行くところはたくさんあり

ます。新型コロナウイルスと共生し、自粛ばかりでなく、工夫し生活することが、これからは大切なことと思います。一日も早くみなさまにお会いできる日を楽しみにしています。



私と手話

山ゆり 田中 光江

手話との関りについて原稿を依頼され僭越ながら要約して書かせていただきます。

私と手話との出会いは、昭和五十年代、地方紙に聴覚障害者の手話講習会受講募集の記事を目にした時、それまで手話を見た事も聞いた事も無かったので興味本位に応募したのが始まりでした。そこで初めて聴覚障がい者（ろう者）から手話の指導を受けました。

学び始めた当初、手話とは手指で話すもので日本語の語順に手話を当てはめれば、ろう者と意思の疎通がはかれると思いい熱心に通いました。当時、まだまだろう者は公の場所で手話をするのをためらう人もいました。一方、ろう者団体の上層部では、ろう者と耳の聴こえる人（聴者）との橋渡しができる、手話に堪能な聴者を育成したいと考え、全国的に手話講習会を開催する事業を始めていました。

しかし手話を教えられる人は、手話を母語とするろう者しかいません。ろう者がどのように聴者に手話を指導したら良いか、指導方法やカリキュラムもまだ確立されていませんでした。今でこそ手話という言葉の分析、研究が進み理論的にも手話とは、こういうものであると説明されていますが、私が学んでいた手話とは随分違っていて学び直しを迫られた大変な時期がありました。

しかし手話の仕事をしている今でも、聴者にとつての母語ではない手話は、常にろう者から学び続けることは欠かせません。ろう者の方々の世界も今は、通信機器の発達と普及により情報の受、発信が容易になりました。

それでも、ろう者と聴者を繋ぐ媒介である手話通訳者は必要なのです。最近、テレビで世界的な新型コロナウイルスの流行で、各国首脳の発言に手話通訳者が付く場面を目にすることが多くなりました。日本での手話通訳者の活動場面は、前述のような場面以外に冠婚葬祭、病院、教育関係、役所、企業等々そこいらろう者がいて要請があれば、どこにでも通訳者は派

遣されます。しかし、通訳者の数はまだまだ足りないのです、もっと増える事を願うと同時に、もっと手話が広がって、ろう者が誰とでもコミュニケーションしやすい環境になればいいなと思っています。

編集後記

広報委員会 佐久間 美津江

私たちの生活を変えてしまった「新型コロナウイルス」、ボランティア活動にも大きく影響した一年でした。

四月の総会もできず、活動も自粛になり「四季の里」の発刊もどうしようか話し合いました。その結果、今までのボランティアサークルの活動報告でなく、十六号は会員の思いや気持ち、知恵、希望、夢等を御寄稿していただきました。

コロナ禍の中での社会生活。まず心と体の健康を大切に、家族の絆・災害時の取り組み・備え等、この状況だからこそ、できる事を見つたり考えて、みんなで協力し、明るい社会を目指して頑張りましょう。